

領域「環境」から生活科の内容5・6へつながる学びのプロセス

— 自然の不思議さに気付かせる「遊び」を通して —

The process of learning that leads from the area “environment” to contents 5 and 6 of living environment studies

— Through “play” that make children aware of the wonders of nature —

次世代教育学部教育経営学科

三堀 仁

MITSUBORI, Hitoshi

Department of Management for Education

Faculty of Education for Future Generations

要旨：幼児教育と小学校教育との接続についてはカリキュラムの開発・改善が求められている。本稿は、「遊び」についての捉え方の違いを踏まえつつ、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領に示されている「ねらい」や「内容」の中で共通性の高い領域「環境」と生活科の内容5・6に着目し、発達段階に応じた学びのプロセスを「架け橋期のカリキュラム」の枠組みをもとに示したものである。具体的には自然の不思議さに気付かせる「遊び」を取り上げ、教科書で紹介されている教材の洗い出しや大学の授業場面における学生の教材研究体験をもとに、年長、1年、2年の3段階の活動計画例を作成した。

キーワード：科学遊び、スパイラル、架け橋期のカリキュラム

1. はじめに

これまで幼児教育と小学校教育との接続については、小学校入学当初のスタートカリキュラムの開発は見られるものの、子ども同士の交流や職員間の交流の段階にとどまっているのが現状である。「幼稚園で行う芋掘りと生活科で行う芋掘りはどこが違うのか」といった声は生活科誕生当初から聞こえている。活動内容面でのカリキュラム開発が求められている。

2. 幼小接続の現状と課題

平成17年の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」では、発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実として、小学校教育との接続の強化がうたわれている。平成20年3月告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要領では、幼小の接続が明記され、幼児と児童との交流、職員間の交流や連携を図ることが示された。これにより、幼稚園、保育所、小

学校が交流や連携を模索するようになってきた。

平成22年11月に文部科学省がまとめた「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」によれば、「主として、幼児と児童の交流活動や幼小の教職員の意見交換等の取組はある程度行われてきており、『幼稚園と小学校における幼児と児童の交流』の実施率は56%、『教員同士の意見交換等の交流』の実施率は55%となっている」とある。一方で「今後、幼小接続の取組を進めるためには、まず何よりも子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解するための道筋を明らかにすることが必要である」としている。交流の段階にとどまるのではなく、教育活動における学びの連続性を明確にすることを求めている。報告書では子どもの発達や学びの連続性を踏まえて幼児期の年長から小学校低学年までの時期を「接続期」と捉える必要があるとしている。

令和3年7月、中央教育審議会初等中等教育分科会に「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置され、令和5年2月に「学びや生活の基盤をつくる

幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」がまとめられた(「架け橋期」とは5歳児から小学校1年生までの2年間を指す)。これによると園と小学校の連携の取組が9割に進展しているがその多くは行事の交流等にとどまっており、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成が行われていない現状が見える。「幼保小の架け橋プログラムの実施にむけての手引き(初版)」によれば「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとし、育成を目指す資質・能力を視野に入れながら「架け橋期のカリキュラム」をつくり具体化し、実践を積み重ねていくことが重要であるとしている。

「架け橋期のカリキュラム」で示された「共通の視点として考えられる項目例」は、①期待する子ども像②遊びや学びのプロセス③園で展開される活動/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構成等④指導上の配慮事項⑤子どもの交流⑥家庭や地域との連携である。

これらの項目を手掛かりに、本稿は内容面で共通性の高い幼稚園教育要領及び保育所保育指針の領域「環境」と生活科の内容5・6を取り上げ、学びの連続性が見られるように活動計画を示し具体化を図ることを目的とする。

3. 研究方法

ここでは、主に「自然の不思議さに気付かせる活動」を取り上げ、次のように進めていく。

- ① 「遊び」についての幼児教育と小学校教育との捉え方の違いを踏まえつつ、領域「環境」と生活科との関連を幼稚園教育要領・小学校学習指導要領から把握する。
- ② 生活科の教科書に見られる「自然の不思議さに気付かせる活動(遊び)」を洗い出し、どのような遊びが教材として取り上げられているか整理する。
- ③ 年長児の遊びとしても活用できそうな教材について、本学の学生への調査をもとに取り上げていく。
- ④ ①～③を踏まえ、「架け橋期のカリキュラム」を参考に活動計画例を作成する。

4. 領域「環境」と生活科

4.1 領域「環境」と生活科の内容との関連

生活科の内容5は、「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。」内容6は、「身近な自然を利用したり、身近にあるものを使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくりことができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。」(小学校学習指導要領より)である。

幼稚園教育要領解説には、「幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものを『ねらい』とし、それを達成するために教師が幼児の発達の実情を踏まえながら指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものを『内容』とした」とある。健康・人間関係・環境・言葉・表現の5つの領域は、この「ねらい」と「内容」を発達の側面からまとめたものである。同解説では「各領域に示している事項は、教師が幼児の生活を通して総合的な指導を行うための視点であり、幼児の関わる環境を構成する場合の視点でもある」と説明している。すなわち、幼児教育の領域は幼児の生活や関わる環境という大きなくくりを見る視点であり、学校教育で使われる領域とは意味的に異なるものである。「遊び」という場面においても「健康」という視点もあれば「人間関係」「環境」という視点もある点を押さえておかなければならない。

領域「環境」のねらいについて幼稚園教育要領では、①身近な環境に親しみ、自然とふれあう中で様々な事象に興味や関心をもつ。②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりして生活に取り入れようとする。③身近な事象を見たり、考えたり扱ったりする中で、物の性質や数量文字などに対する感覚を豊かにする。この3点である。内容は12項目で、生活科の内容と関連付けられるものは次のとおりである。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(生活科内容5・6と関連)
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。(内容6と関連)

- (3) 季節により自然や人間の生活変化のあることに気付く。(内容5と関連)
- (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。(内容5と関連)
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。(内容7：動植物の飼育栽培と関連)
- (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。(内容5と関連)
- (7) 身近な物を大切にすること。(内容6と関連)
- (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。(内容6と関連)

このように見ると領域「環境」は生活科の内容5・6との関係が深いことが分かる。身近な自然や物に興味をもって関わり、遊びに取り入れたり、自分なりに工夫したりして、自然の不思議さや面白さに気付くようにする内容である。季節感あふれる遊び、自然物を取り入れた制作遊びなどを行うときには、「環境」という視点の占めるところが大きくなる。

4.2 「遊び」の捉え方

生活科では「遊び」という言葉が多く使われる。これは児童の思いや願いを実現させるという生活科の見方・考え方からくるものであり、直接体験を重視する教科特性としての側面が強調されているからである。

小田(2009)は、保育所・幼稚園の教育実践は「目的としての遊び」が大半を占めており、生活科では「手段としての遊び」が行われていると整理しつつ、意図的教育の場としての保育所、幼稚園、小学校では、「手段としての遊び」を抜きにしては教育は考えられないとしている¹⁾。

幼児教育でも自然発生的な遊びだけでなく、環境構成の中で園児に興味を持たせたいものを意図的に教師が用意する場面もある。生活科の授業の中でも条件設定はありながらもその中で児童にかなり自由度の高い遊びの場面を用意することもある。生活科が幼小接続の核と言われる所以はこの点にある。「遊び」の捉え方の相違を踏まえて幼児教育と小学校教育の接続を考えていかなければならない。

5. 教科書にみる内容5・6を扱った活動例

生活科の検定教科書を発行している主な7社の教科書のページを調査し、どのような教材が例示されてい

るのか見ていくこととする。

表1は、平成30年度版の生活科の検定教科書のうち、7社の上巻・下巻を取り上げ、内容5・6に関わる単元の中で、3社以上の教科書で紹介されている教材(活動例)をまとめたものである。

表1 検定教科書に紹介されている教材

	紹介されている教材	A社	B社	C社	D社	E社	F社	G社
上巻	花でたたき染め	●		●				●
主な自然遊び	押し花	●		●	●	●		●
	草花遊び	●	●	●	●	●	●	●
(春夏)	水鉄砲	●	●	●	●	●	●	●
	しゃぼん玉	●		●	●	●	●	●
	花で色水遊び	●	●	●	●		●	●
	笹舟		●		●			●
	どろだんご			●	●		●	●
(秋)	はり絵	●	●		●		●	
	こすり出し	●	●				●	
	葉や実で飾りづくり	●	●	●	●	●	●	
	どんぐりごま	●	●	●	●	●	●	●
	マラカス	●	●	●		●	●	●
	やじろべえ	●	●	●	●	●	●	●
	まつかさでけん玉	●	●	●	●	●	●	●
	まつかさでの入れ	●				●		
(冬)	ビニルたこ	●	●	●	●	●		●
	かざぐるま	●	●	●	●	●	●	●
	風輪		●	●		●	●	
下巻	輪ゴムとコップ(飛ぶ)	●	●		●		●	●
おもちゃづくり	輪ゴムと厚紙(飛ぶ)	●	●	●			●	●
	輪ゴムと重り(進む)	●				●	●	●
	重り(転がる)	●	●	●	●		●	
	容器と筒(飛ぶ)	●						
	風と車(進む)	●	●	●	●	●	●	●
	傘袋とロケット(飛ぶ)		●		●	●		●
	ゴムとロケット(飛ぶ)		●	●		●		
	磁石で魚釣り			●		●		●

1年生が主に使用する上巻では、春や夏の自然遊びとして、シロツメクサやおオバコを使った草花遊びはどの教科書にも紹介されている。夏の遊びとして「水でっぼう」は全教科書に、「しゃぼん玉」やアサガオの花などから汁を取り出す「色水遊び」は6社の教科書で見ることができる。秋の活動で多いものはどんぐりを素材とした簡単なおもちゃ作りである。「どんぐりごま」と「やじろべえ」作りはすべての教科書に掲載されている。まつかさ(まつぼっくり)も素材として利用しやすい。冬の遊びは風を利用したものが目立つ。

2年生が主に使用する下巻では、どの教科書も内容6に関わるおもちゃ作りとなっている。自然物よりも自然現象に着目させようとしており、ゴムの弾力性、磁石の持つ磁力、高低差(重力)、風力、空気圧等に

よる「自然の不思議さ」に気付かせるようになっていく。

下巻で内容5を扱う教科書は少ないが、1年生段階より内容の濃い活動を展開できることから、2年生でも内容5を積極的に扱うことが求められる。2学年にわたって上巻を使うことでスパイラルな学びとなる。

幼稚園や保育所の指導者と小学校の教員との交流の場において、当該校で使用している生活科の教科書を見ながら情報交換することも有効である。ただし、小学校でこのような学習をするから園でも事前にこんな活動をしておこうと指導するのは適切ではない。園生活でたっぷり自然に浸る活動や自然の不思議さを感じる遊びを存分に行う中で、指導者はこうした活動が結果的に小学校の生活科の内容につながっていくのだという点を理解しておくことが大切である。

6. 幼児教育に見る「科学遊び」

幼児教育において「科学遊び」と呼ばれているものがある。佐藤（2022）は「幼稚園教育要領の領域『環境』の内容を見ると、（1）～（9）までの項目がすべて科学遊びの概念に含まれる」とし、特に（1）（2）（4）（7）（8）が関連しているとしている²⁾。「ダンゴムシを捕まえたとき『どんなところに住んでいるのかな?』『何を食べるんだろう』などの生きものの生態に関する問いかけをしてみる。紙飛行機を飛ばすとき『もっと遠くに飛ぶように飛行機を作ってみよう!』と呼びかける。こういった声かけや質問が、子どもの好奇心をより強めるのである。」と述べている。

これは生活科の学習活動と重なり合うものである。とりわけダンゴムシや紙飛行機の例にある教師の問いかけは生活科の学習活動で教師が児童に発問している言葉そのものである。前回の学習指導要領（平成20年告示）で、生活科について「科学的な見方・考え方の基礎」を養うという視点が強調されたが、幼児教育という「科学遊び」と軌を一にするものである。

科学遊びについて佐藤は自然現象の面から6つに分類している。

音に関する遊び…輪ゴム、空き缶、ペットボトルなど
光に関する遊び…虫眼鏡、水たまり、色水など
力に関する遊び…やじろべえ、ゴム、バネなど
空気に関する遊び…風車、空気鉄砲、竹とんぼなど
水に関する遊び…水鉄砲、しゃぼん玉、氷など
植物や動物に関する遊び…園庭の植物や動物など

「大切なことは、一つの遊びがいろいろな分野と関

連しており、保育者はその多様性を認識した上で、子どもたちの関心や興味を育てていくこと」と佐藤が述べているように、日常生活の中で何気なく触れ、興味・関心をもち、自分なりに自然の不思議さに気付いていくことが大切である。そのためには、幼稚園や保育所でも体験し、生活科の授業でも体験するというように繰り返し対象に関わる必要がある。

7. 幼児教育をめざす学生による素材の評価

本学の専門基礎科目「生活の理解」（2022年度後期）を受講した幼児教育をめざす学生（主として2・3年生102名）に、身近な素材を利用した遊びについての考えを聞いた。

「生活の理解」の授業の中で内容5・6を扱った際に、教科書で紹介されているいくつかの教材を実際に作って遊ぶという教材研究を行った。例えばキャンパスでマテバシイを採集し、どんぐり人形やどんぐりゴマを作って楽しむという体験である。



図1 学生が作成したどんぐり人形

こうした体験と学生自身によるこれまでの園での実習経験を踏まえて、幼稚園や保育所の主として年長児の遊びに取り入れることができそうな教材を評価してもらった。教材は次の6点である。

- ・のほり人形
厚紙に描いた絵を、たこ糸を使って上へ移動させる。
- ・どんぐり人形
どんぐりに白や黒のマーカーで顔や模様を描く。
- ・はり絵とこすり出し
台紙に落ち葉を貼ったりトレーシングペーパーに色鉛筆やクレヨンでこすり出したりする。
- ・どんぐりゴマ
どんぐりに楊枝を刺してコマにする。

・パッチンジャンプ

厚紙に輪ゴムをたすき掛けにし跳ね上げる。

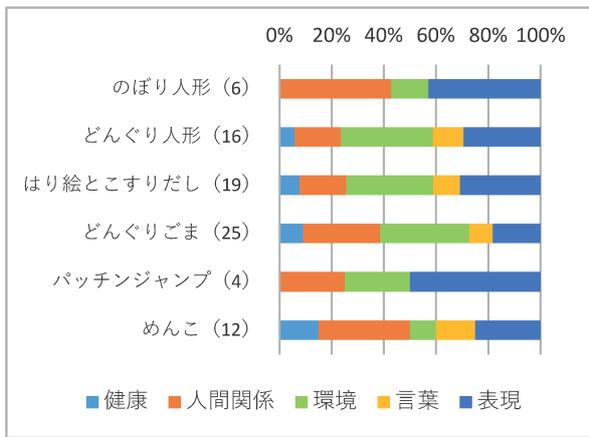
・めんこ

厚紙を4×6cm程度の長方形に切り、絵を描く。

この中から年長児の遊びに取り入れられそうな教材を1点選び、その理由と領域との関連を尋ねた。

2023年1月11日に実施し、82名から回答があった。これによると、どんぐりゴマ、はり絵とこすり出し、どんぐり人形の順であった。関連する領域としては「環境」の割合が高い結果となった。(表2)

表2 園の遊びに生かせる生活科の教材と関係領域



〔どんぐりゴマでの遊び方 (例)〕

- ・教師がどんぐりゴマを作って置いておく。それに気付いた子どもたちが作り出す。
- ・危ない作業は保育者が補助をしたり下準備をしたりしておく。
- ・友だちとどちらが長く回るか競争して遊ぶ。

〔どんぐり人形での遊び方 (例)〕

- ・秋の遠足で拾って帰る。制作したら画用紙に貼り付け飾る。
- ・どんぐりだけではなく栗や落ち葉なども拾ってボンドで顔を作る。
- ・朝の歌で「どんぐりころころ」を歌う時期に制作する。

〔はり絵とこすり出し (例)〕

- ・好きな落ち葉を拾って好きなように表現する。
- ・はり絵でカードを作って家の人にプレゼントをする。
- ・取ってきた材料を置く机と制作する机を分けるなど環境を整える。

このように見ると、手指の巧緻性や力の加減といった発達段階に関わる配慮を指導者が行うという点は求められるが、年長児であれば、教師による意図的な環

境構成の中でも自由に楽しく自然を取り入れた遊びができ、それは生活科の内容5・6の活動に近いものであると言える。

8. 「架け橋期のカリキュラム」の作成及び考察

幼小接続のカリキュラム開発に際し、これまで取り上げたいいくつかの視点をもとに整理すると、自然の不思議さに気付かせるような活動は、繰り返し遊ぶことによって気付きや思考が深まるため、年長から2年生までの3年間(接続期)が適当である。活動内容は、「科学遊び」などの意図的な遊びも年長児が十分にできることから、生活科の活動と重なる面があってよい。ただし、発達段階を考慮し少しずつねらいや内容を深めていくスパイラルな学びのプロセスが必要である。

こうした点を踏まえて「架け橋期のカリキュラム」の「共通の視点として考えられる項目例」を参考に、年長児、1年生、2年生の各段階の活動例を作成した。

活動名：はっばやどんぐりであそぼう	
活動時期：11月 活動場所：園外・園庭・保育室	
期待する子ども像	自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
遊びや学びのプロセス	→幼児期10(自然との関わり・感性と表現) →生活科内容5・6 遊びの中で興味をもったものに取り組む。 自分なりに工夫して遊んだり自由に表現したりする。
活動	「どんぐりころころ」などの歌を歌う。 近隣の自然豊かな公園等へ散歩に行き、きれいな色・形の落ち葉や好きな形のどんぐりを拾い、園に持ち帰って遊ぶ。 はり絵やこすり出しで作品をつくり保育室の壁面に張ったり家の人にプレゼントをしたりする。どんぐり人形をつくりまごこと遊びをする。どんぐりゴマを作って競争して遊ぶ。
指導上の配慮事項	教師の関わり 自由な雰囲気の中で遊ぶようにし、活動への強制はしない。 どんぐりゴマの軸の穴あけなど、園児に難しい作業は教師が行う。 どんぐりころころやマラカスづくりなど園児の遊びが広がるように教師が援助する。 園児同士の見え合いなどができるように教師が援助する。 環境構成・環境づくり 事前に教師が落ち葉やどんぐりで作品をつくりさりげなく保育室に飾っておく。 落ち葉やどんぐりは教師が多めに取っておき、作業テーブルに置いて、園児が自由に使えるようにする。 安心して遊びに没頭できるようにし、安全面に十分に配慮する。

図2 木の実や種を扱った活動例(年長児)

活動名：あきとあそぼう	
活動時期：11月 活動場所：校外・教室	
期待する子ども像	(生活科内容5・6) 秋の自然に親しもうとしている。 よりよいものを作ろうと工夫している。 友だちと協働し活動を楽しんでいる。
遊びや学びのプロセス	→幼児期10(自然との関わり・感性と表現) 園での体験を思い出して秋の自然に積極的に関わる。 自分なりの気付きを多く獲得する。
活動	近隣の自然豊かな公園等(季節ごとに出かける)で「秋さがし」をする。 夏の様子と比べる(草花・木の実・虫などの違いに気付く)。 形・大きさの違うどんぐりやお気に入りの葉っぱを各自で拾う。 教室に戻り「秋さがし」で見つけたものをお互いに紹介する(交換してもよい)。 はり絵にしたりどんぐり人形・どんぐりゴマを作ったりして遊ぶ。
指導上の配慮事項	教師の関わり オリジナルな作品を作るよう指示する。 自分で作ったものに愛着をもてるようにする。 どんぐりゴマがよく回るよう工夫させる(どんぐりの形・芯を刺す位置、芯の長さ)。 どんぐりゴマの穴あけ作業が自分で行えるように固定台を準備する。 環境構成・環境づくり 友だちと関わりながら活動できるように机を並べる。 マーカー、クレヨン、ボンド、台紙など、児童が使いたいと思われる用具を生活科室から運び入れる(生活科室を充実させておく)。

図3 木の実や種を扱った活動例(1年生)

活動名：木のみやたねであそぼう	
活動時期：11月 活動場所：校外・教室	
期待する子ども像	【生活科内容5・6】 季節による自然の変化に気付いている。 植物の種の不思議さに気付いている。 友だちと協働し活動を楽しんでいる。
遊びや学びのプロセス	⇒理科（生命・地球） 遊びや体験を通して科学的な見方・考え方の基礎を身に付ける段階
活動	自然豊かな公園等で自然に親しみ、どんぐりから芽が出ていることに気付く。 カエルの種で遊びながら影や落ち方の面白さに気付く。 羽のついた種（ツクバネやアルストラ）の模型を作って遊ぶ。 【例】普通紙で簡単な模型を作りクリップをどのように付けたらよく滑空するか工夫して遊ぶ。「小さいクリップを1つ真ん中に付けるとよく飛んだよ。」
指導上の配慮事項	教師の関わり 「○○すると○○になる。」のように児童の気付きを整理する支援をする。 児童が自然の不思議さに興味を見出そうとすることを支援する。 理科ではないことを押さえて指導に当たる。 環境構成・環境づくり 生命の不思議さに気付くような参考資料や展示物を用意する。 友だちと協働して活動できるように場面設定をする。 地域の環境や特色を把握し、本校にふさわしい活動になるよう教材研究をする。

図4 木の実や種を扱った活動例（2年生）

図に示したものは、葉っぱやどんぐりなど秋の自然物を扱った活動計画例である。図2は年長児を対象とした活動例で、自由に遊べる環境の中に、意図的な場面設定（手段としての遊び）を施したものである。ポイントは興味があれば関わり、いつ遊びを放棄してもよいという自由度である。また、発達段階を考慮し、難しい部分は教師が援助するようにしている。図3は1年生の生活科における活動例で、児童が思い思いに楽しめるようにしてあるが、全員が取り組むという点が年長児の活動と異なる。また、素材の違いに気付かせたりより良いものに改善する工夫を促したりする教師の働きかけが示されている。図4は2年生の活動例で、○○したら○○○になった、という科学的な見方や、教科書の上巻の内容をさらに発展させた活動内容を盛り込み、活動を広げたり深めたりして結果的に3年生以降の理科の内容につながるようにした。

幼小共通の活動計画案の作成が可能となったことにより、同じ教材を使った活動でもスパイラルに「遊び」から「学び」への質的転換を図るという学びのプロセスを示すことができた。ここでは「自然の不思議さ」に関わる遊びを取り上げたが、他の領域と生活科の内容と関連付けて同様な活動計画案を作成することや作成した活動計画を実践し評価・改善していくことが今後の課題である。

9. おわりに

「幼稚園で行う芋掘りと生活科で行う芋掘りはどこが違うのか」の問いには「同じ学びという側面があってよい。ただし繰り返し活動することによって子どもは自然の不思議さといったものの見方を深め活動にも自ずと広がりが出てくる。指導者は発達段階に応じたねらいと内容を適切に設定することが肝要である。」

と答えることができるであろう。スパイラルな学びのプロセスがこの時期の子どもには必要である。

注

- 1) 小田（2009）は、偶発的、自然発生的で、子どもの自由感あふれる遊びを「目的としての遊び」とよび、計画的、組織的に設計された遊びを「手段としての遊び」とよんでいる。
- 2) 佐藤（2022）は科学遊びを「遊びの中に科学的探究心の芽を育む要素を含んでいるもの」と説明している。

引用・参考文献

- 片上宗二・山口令司（2020）「せいかつ」（上・下）学校図書
- 村川雅弘（2020）「わたしとせいかつ」（上・下）日本文芸出版
- 文部科学省（2022）「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」p4
<https://www.city.matsubara.lg.jp/material/files/group/16/t03.pdf>
参照日：2023年9月1日
- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説生活編」日本文芸出版p3
- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説生活編」東洋館出版pp38-41
- 文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説」フレーベル館p134
- 野田敦敬（2020）「たのしいせいかつ」（上・下）大日本図書
- 小田豊・青井倫子（2009）「幼児教育の方法」北大路書房pp102-104
- 佐藤英文・無藤隆・中坪史典・後藤紀子（2022）「新版保育内容『環境』」大学図書出版pp100-102
- 篠原孝子・田村学（2010）「幼稚園・保育所と小学校の連携ポイント」ぎょうせい
- 嶋野道弘（2020）「せいかつ」（上・下）光村図書
- 田村学・奈須正裕・吉田豊香（2020）「新しい生活」（上・下）東京書籍
- 中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会（2023）「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」p7
https://www.mext.go.jp/content/20220307-xt_

youji-1258019_03.pdf

参照日：2023年9月1日

寺尾慎一・中野真志（2021）「せいかつ」（上・下）啓
林館

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関
する調査研究協力者会議（2010）「幼児期の教育と
小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」
p29

[https://www.mext.go.jp/component/b_menu/
shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/
11/22/1298955_1_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf)

参照日：2023年9月1日

養老孟司・藤井千恵子（2020）「せいかつ」（上・下）
教育出版